

あなたの親指と人差し指で輪を作ってみてください。その輪の向こうに何が見えますか？離して見れば小さな輪ですが、角度を変えれば見えるものが変わり、目のすぐ前に持ってくれば見える世界は広がります。大きさがあるようで限界が無く、何も無いようで実は宇宙に届き、命の源である太陽に繋がる...円環はイサム・ノグチの作品の中でもその一つ、見えないものの存在、無の空間を抱く円、それは日本の禅の心「全てのものがそこから出て行き帰るところ」に通じるのかもしれない。



イサム・ノグチ《真夜中の太陽》1989年 横浜美術館蔵 撮影：菅谷守良
(c)2006 The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum / AFS, New York / SPA, Tokyo

イサム ノグチ 展

世界と
つながる
彫刻

2006年9月29日(金)
～11月12日(日)



イサム・ノグチ《マーサ・グラハムのダンス》「舞い歌」のための舞台装置（花巻）と《園》（1946年、マーサ・グラハム・スクール・アンド・ダンス・カンパニー（ニューヨーク）蔵）
photo by Kevin Noble

庭園を見たイサムは「地球それ自体が彫刻なのではないか」という閃（ひらめ）きを得ます。素材は従来の枠に留まらず、水の彫刻「噴水」、光の彫刻「あかり」、そして庭や公園など空間や大地までも彫刻していくことになりました。27歳、京都の禅寺で日本ですが、1964年香川県牟礼で、牟礼町・五剣山の麓（ふもと）にお和泉正敏に出会い、牟礼町・五剣山の麓（ふもと）にお気に入りの場所を見つけます。没後18年、この地でイサム・ノグチ展が開かれますが、高松市美術館で作品を楽しんだ後は、ぜひ牟礼の庭園美術館を訪ねてみてください。時間は、自分の人生を彫刻した男、イサム・ノグチ「ここです。私はここにいます」
[池田幸子]

ロートレック賛歌展

2007年2月16日(金)～3月25日(日)



アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック
《ムーラン・ルージュ、ラ・グーリュ》1891年

1891年ベルエポックと呼ばれた新しい文化・芸術がパリを中心に栄えた良き時代、パリの街角に貼られたこのポスターは発表されるや否や大評判となりました。描かれているのは巨大な赤い風車が目印のモンマルトルにある有名なナイトクラブ「ムーラン・ルージュ」。中央で足を腰の高さまで上げフレンチカンカンを踊るのは当時人気絶頂だった踊り子ラ・グーリュです。前景の男と影絵のような後景の観客を平面的に描くことで躍動感のある主役を際立たせています。大胆な構図と鮮やかな色彩、絶妙な字体と配置、今も昔もこのポスターに誘われて足を運んだ人も多いのでは？アンリ・ド・トゥールズ＝ロートレック（1864～1901）は、由緒ある貴族の長男として生まれるも足の成長が止まるといふ障害を背負い小人のような容姿にコンプレックスを持ちます。そしてそれが故に画家を志し貴族の生活とは正反対の酒場で遊興する人々や踊り子、娼婦などパリの下層で生きる人々の風俗を数多く描きました。

当作品を一作目としてポスター作家として活躍した僅か10年の間に31点のポスターを制作し単なる広告や情報媒体であったポスターを芸術的なものへと高めていったのです。本展は、没後100年を記念して2001年に天保山サントリーミュージアムで開催された展覧会が巡回するもので、ロートレックのオリジナル・ポスター31点を軸に、世界中の著名なグラフィックデザイナー100人が彼へのオマージュ（賞賛）として制作した100点のポスターが展示されます。現代に受け継がれるロートレック芸術の魅力をお楽しみください。
[木村真由美]

■主な活動 2006年

- 4.1◆しびの一と13号発行
- 4.27◆「エミール・ガレとドーム兄弟展」監修者・池田まゆみ氏によるcivi対象ギャラリートーク参加
- 4.28-6.11◆「エルミタージュ美術館秘蔵 エミール・ガレとドーム兄弟展」ギャラリートーク（会期中毎日曜・祝日、各日午前・午後（10.29は午前のみ）、開催回数のべ21回、参加者数のべ568名）…**A**
- 6.3◆イサム・ノグチ庭園美術館見学
- 6.11◆子どものアトリエvol.9「マイグラスをつくってみよう！」（講師：エッチングガラス工房にのみや〜と主宰者・二宮康勝氏）アシスタント
- 7.8◆依田順子さんを囲んで…**B**
- 7.21-9.3◆「ミッフィー展」ギャラリートーク（会期中毎日曜、各日午前・午後、開催回数のべ14回、参加者数のべ220名）…**C**
- 8.8/9/10◆子どものアトリエvol.10「ブルーナさん、おしえて！」（講師：美術作家・川崎展子氏）アシスタント…**D**
- 8.17◆高松市小学校教科別研修会におけるアシスタント（ミッフィー展ギャラリートーク、アートゲーム）



突撃

アートの晩ごはん

11

「代表的な日本食といえば何？」と問われたら、何と答えますか？海外の友人に同じ質問をしてみたら、やはりというべきか「寿司」との答え。このように、一般に国とその地の代表的な食べ物って結構固定化していますよね。例えば、ドイツならソーセージ、イタリアならパスタといったところでしょうか。どれも日本人に馴染み深い食事です。だけど、あれ？アフリカの国々の代表的な料理って何でしょう？そう！今回の食事はアフリカです！

アフリカ大陸で有名な（？）国といえばエジプト！エジプトといえばピラミッドやミイラ！テレビなどで目にする古代エジプトは金銀の器や装飾品、色とりどりの花々、でもその色彩豊かな世界のなかであまり食事には目がいきません。ここで古代エジプトの葬送用に制作されたある石碑を見てみましょう。

古代エジプトでは死後の世界を重要視したため、ミイラの製作やアヌビス神が死者の心臓をマアトの羽根と天秤で量っている場面、そして神々の絵が有名で、あまり一般的な食卓は出てきません。けれど、よく探してみると神々への供え物として食物が描かれています。

この石碑に描かれた供物卓には鴨やビール、牛の頭、肉や野菜などが山積みされ、右側



《ケティのステラ》（部分）ウィーン美術史美術館蔵

その一つが麦です。古代エジプトではビールは一般的な飲み物で、流れる川のようには無酵母のものと、天然酵母を使ったものがあり、形もさまざまで、祝祭用に動物や人の姿をかたどったものもありました。かの有名なツタンカーメン王のお墓からもパンが出土しているそうですよ。

エジプトの食べ物ビールやパンとはなかなか結びつきませんが、ではこれは？羊の肉（マトン）を使ったシシカバブはイスラムの肉料理の基本とか。二〇一〇年にはサッカーのワールドカップがアフリカ（南ですが）で開かれます。これを機会にアフリカの食文化に触れてみてはいかがでしょう？

今晚のおかずはシシカバブ？

「石床垂紀」

A エミール・ガレとドーム兄弟展 ギャラリートークを終えて [4.28-6.11]
アール・ヌーヴォーの巨匠によるガラス工芸品の展覧会ということもあって、たくさんの方がギャラリートークに参加して下さいました。「ガラス」とひと言でいっても、作る技法は様々。どのようにして作られているのかイメージしながら鑑賞するのも楽しい展覧会でした。トークの中で、特別に許可を得て何点かの作品にライトを当ててみました。すると、今まで見ていなかった模様が浮かびあがったり、光の加減でガラスの色が変わっていく姿にお客様と一緒に魅了されました。作品の新たな一面を垣間見た気分です。ガラスの神秘、作り手の技に感嘆しました。エミール・ガレの作品には、野に生息する素朴な植物、カエルやトンボのような身近な生物が数多く登場します。ガレの生きとし生けるものへの愛情を感じずにはいられません。もしできることなら… いつか手にとって彼の作品を楽しみたいものです。
[和泉悦子]

B 依田順子さんを囲んで [7.8]
東京での個展などのために帰国中の依田さん、過密な予定の中時間をやりくりして、civiの前に爽やかな笑顔を見せて下さいました。しびの一と11号の「civiが見た 高松市美術館コレクション」の欄で、依田さんの作品「サスケハナ川」を取り上げた際、メールなどで取材させて頂き、「ご帰国の折にはぜひ美術館へ」といった話が幸運にも実現したのです。

話は、最新作「吉野川」の制作風景をビデオで見ながらスタート、生まれ故郷の徳島県三好市を流れる吉野川を描いたこの作品は、やはり和紙と紙紐を使って蝶のような形のパーツをいくつも貼り付ける手法がとられていると、実際に作品に使った物を持ってきて見せて下さいました。5mをこえる大作を俯瞰（ふかん）した時には分かりにくい非常に繊細な手仕事を、手に触れて見る事ができました。アース・ワーク（大地の芸術）、とも評される依田さんの独創性に強い感銘を受けました。最近では、紙粘土で「貝殻」の形を作り立体のインスタレーションも手がけていると、作られた「貝殻」も手に取らせて頂きましたが、固くて本物の貝殻のようでした。

依田作品のテーマともいえる「川」には、人生は旅を続ける川のようなもの、との意味が、「貝殻」には、9・11事件を目の当たりにされた経験から、屍の意味が…と、目を伏せて話されました。

仕事場は、家事もこなす台所、とおっしゃる依田さん、ご家族の芸術活動や猫のお話など、その他諸々、気さくにたくさんのお話をして下さいました。初めてお目にかかった方とはとても思えず、今では「サスケハナ川」や「吉野川」の作品がまるで身内のように感じられます。本当に得難い貴重な経験でした。（依田さんは2006年9月12日～10月21日NYのザブリスキー・ギャラリーで個展“THE HUDSON”を開催されます）
[石原ミエ子]



▲依田順子氏

C 「ミッフィー展」ギャラリートークを終えて [7.21-9.3]
「ミッフィー」の生誕50周年を記念しての展覧会。そのなかで「左右非対称でフリーハンド型」のプロトタイプ・ミッフィーが紹介されていましたが、ご覧になられた皆さんはどんな感想を持たれましたか？私は50年前に描かれたその素直で自然なラインがとても気に入リ、見慣れない「元祖ミッフィー」をいつまでも眺めてしまいました。少し不安そうに傾いた顔。弱々しくも愛くるしい表情に、なんともいえない可愛さを感じたのです。ミッフィーの絵本は世界40ヶ国語で翻訳されていますが、それぞれの国で愛称が違う事も今回始めて知りました。故郷のオランダでは「ナインチェ」、フランスでは「ブチ・ラパン」、日本では「うさこちゃん」等々…いずれも「うさぎの子」という意味です。今回は普段と少し雰囲気の違いを感じるキャラクターの展覧会なので、お客様と共に「発見し合う」気さくなギャラリートークになりました。もちろん、そんな空気を作ってくれた作者D・ブルーナ氏にも感謝！
[大澤宏敏]

D 子どものアトリエvol.10「ブルーナさん、おしえて！」
（講師：美術作家・川崎展子氏）のアシスタントをして[8.8/9/10]
当館では例年8月に博物館実習の大学生を受け入れ、同時期に開催されるワークショップのアシスタントを、シヴィの皆さんと共にしてもらっています。今年の実習生は25名と（恐らく）過去最高人数。各自、川崎展子先生がミッフィー展とリンクさせて用意した、6つのプログラムのいずれかのアシスタントをしてもらいました。夏休みでエネルギーが有り余っている（？）子供たち相手に奮闘してくれた彼らの感想を少しご紹介します。

◆8月10日午前「ミッフィー帽をつくろう」子どもたちは紙袋を使ってウサギの耳を作り、絵の具や折り紙、毛糸、ボタンなど様々な材料で自分だけのミッフィー帽を作りました。その後、作った帽子を被って館内をパレード。いろんなミッフィー帽が出来上がってとても楽しい時間を過ごしました。
[E班 田尾若菜]

◆8月10日午後「絵本を作ろう！」すぐに描き出す子、最後まで悩んでいた子、たくさんいたけど、出来上がったものは同じ物が何一つないユニークな作品でした。完成してすぐうれしそうに発表している姿を見て私達もすぐうれしくなりました。楽しみながら芸術に触れる事の大切さを実感した体験でした。
[F班 三宅奈津季]

ちなみに、実習生には今年も恒例のミニ美術館づくりをしてもらいました。これは過去にしびの一とでも紹介しましたが、40分の1常設展示室に、縮小した作品写真を並べ、展示の仕様の疑似体験をしてもらうというものです。最後にはギャラリートークもしてもらいます。一例を紹介しますと、写真は子供向け課題に取り組んだ班で、マチスのジャズとウォーホルのフラワーズを展示し、部屋の中央に設置した机で、子供たちに作品からのインスピレーションを元に切り紙絵を制作してもらうという内容。題して「つくってあそぼう！展」。また、他にもいろいろユニークな企画があり、私自身の今後の企画のヒントにもなりそうです。



[高松市美術館学芸員 牧野裕二] ▲パワーポイントによる「つくってあそぼう！展」ギャラリートーク

眺とつながるために 刊 イサム・ノグチ展教育プログラム

8月末、うれしい訪問がありました。高松市内のとある小学校の先生方4人が、秋の「イサム・ノグチ展」に、子どもたちを連れて来たいのだけど、受け入れてくれますかと。学年は2年生で、200名ほどとか。

夏休み恒例となった美術館での小学校教科別研修会（図画工作）で、紹介させていただいた子ども向けのプログラムに強く心惹かれたM先生。その感動をほか2学年担任の先生方に伝えてくださっての来館でした。「どこが良かったのですか？」とお尋ねすると、「美術館のバックヤードは、子どもたちをわくわくさせながら裏方の大切さを知らせることになるし、常設展で作品を見ながら〈川柳〉に興じることは、子どもたちこそ得意になって楽しむことでしょう。また美術作品のカードを使った〈アート・ゲーム〉は、思わず私自身も熱中してしまい、この遊び心のある鑑賞方法は授業に取り入れられると思いました。」と、ご自分が主体的に美術館で楽しんだ様子を語ってくれました。そして、そうした体験を子どもたちにもさせたい、と。その申し入れ、とても嬉しくて、当日は子どもたちを小グループに分け、「イサム・ノグチ展」を中心に、作品と能動的に関われるプログラムを展開します、と即答してしまいました。

さて、そのイサム・ノグチさんは、晩年、香川県牟礼にアトリエを構え、石の作品を制作した世界的な彫刻家。香川ゆかりのイサムさん、その想像の翼は、私たちを様々なところへと連れ立ってくれます。子どもたちと一緒に、イサムさんの翼に乗って、展覧会を楽しみたいと今からわくわくします。

その一つに、会期中の10月21日（土）の午前中、まるごと探偵クラブ「イサム・ノグチ 探検記」（事前申込制）を開催する予定です。（クイズをしながらスタンプラリー）



▲カードゲームに興じる先生方。

〈作品当てっこ〉〈つなぐ形をつくろう〉〈石との対話〉など、美術館の各サイトを子どもたちとクルーズするというものです。

現在、これら「ノグチ展を楽しむプログラム」の内容について、美術館ボランティア「civi」と中学校美術の先生方とともに、喧々諤々と話し合いを積み、企画を練り上げている最中です。各自がイサムさんに深く向かい合い、そこに見たものや体得した考えを交換しつつプログラムを構築しようとしています。本展覧会は11月12日に終了しますが、香川県内には「イサム・ノグチ庭園美術館」はじめイサムさんの作品が展示されたり所蔵されている所があり、学校の授業でもきちんと取り上げることが可能です。ですから、授業へと発展できるプログラムを作れたらとも考えています。

また、当日参加してくれた子どもたちには、イサムさんの彫刻のことはもちろん、ジャンルの垣根を越えて表現することの楽しさや、いつもとは違うお友だちや大人の人々と活動することの面白さを知ってもらえることになればと思います。そして、お互いが世界の広がりやつながりを感じあえたら、と。〔高松市美術館学芸員 毛利直子〕



目を澄ましてじっくりと見て下さい。心がゆったりとして、豊かな気持ちになりませんか。この作品は新進気鋭のアーティスト、押江千衣子の作品です。

彼女は京都芸大大学院在学中に、油絵具での制作に思い悩みオイルパステルを用い始めました。その頃、大学のキャンパス近くで、高さ1、2メートル、大きな茎と葉を持つヨウシュヤマゴボウを見かけ、私の描きたかったものはこれだ！と思い至ったそうです。その描き方は、左手に描く対象となる植物を持ち、右手の腹や指でオイルパステルと油彩で下書きをせず直接画面に描き込んでいくといった独特のものです。草花の力強さが伝わってきますね。

この絵に描かれているのは春から夏にかけて花をつける「ヤブレガサ」。大胆で、みずみずしく新鮮な色彩で彩られています。植物の生命が画面の中で完結してしまわないよう工夫された余白を生かした構図、そして画面上でのびやかに広がる単純化された植物は生命感に溢れ、穏やかなやさしさを湛えています。

「春はれんげ草、タンポポ、ツクシ、白ツメ草…秋はヒガンバナ、柿、あけび、どんぐり、コスモス…。今までずっと側にあって、あるのがあたり前だったもの、出会ったときすぐにこれだ、と気づかないで見過ごしてしまうかも知れないなにか、そういったものを、耳を澄まし、目を澄まして見たまま、感じたままに描きとめたい。」（押江千衣子『目を澄ます』求龍堂）と彼女は述べています。

〔植松紀子〕

（本作は、2006年11月23日～12月10日開催の高松市美術館コレクション展Ⅰにて展示予定）

押江千衣子《ツクシ》一九九七年
油彩・オイルパステル・麻布 一六二×三八八cm

civiが 見た！

高松市美術館コレクション

14

美術
館
日記

第3回
役とと
きひご
わのり

「池田幸子」

「石床亜希」

「石原ミエ子」

〔和泉悦子〕

[植松紀子]

[大澤宏敏]

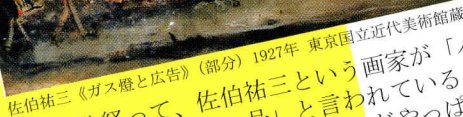
「木村真由」

「合田

「高松市美術館学芸員 牧野裕二」

松市美術館学

絵の左の赤い洋服の女が私。ある日モンパルナスのガス燈のある路を歩いていた時、ひとりの日本人らしい若い画家が絵を描いているのを見かけたわ。パリで絵の勉強をしている外国人画家なんて珍しくはないけど、まるで命を削っているように取付かれたような、まるで命を削って描いているような姿が印象に残っているの。一体何を描いているのかしら？とチラッと辺りの風景を見回してみたけれど、汚れた古い壁に色とりどりの広告がベタベタ貼られているから、まるで広告の溜まり場みたいなこんな風景が絵になるのかしらと不思議に思いながら通り過ぎたわ。近くの街角で、糊の入ったバケツと梯子と長い柄の付いた道具を持った広告貼りの男とすれ違ったっけ。



佐伯祐三《ガス燈と広告》(部分) 1927年 東京国立近代美術館蔵

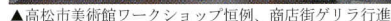
ずい分経って、佐伯祐三という画家が「パリ
を描く日本人画家第一号」と言われていると知
った時、もしかしたらと思ったけどやっぱりそ
うだった。《ガス燈と広告》という作品に私が
ちゃんと描かれていたわ。パリのどこにでもあ
る、私にとってはありふれた風景が、こんな哀
愁を含んだ素敵な絵になるなんてビックリよ。
エトランゼ(異邦人)のあの画家にはきっと
それがとてもパリらしく思えたのね。でもあの
ポスターの文字の線、複雑で多様で造形的で、
これはきっと日本の「書」の影響だと思うわ。
作品の前に立つだけで、日本の書の美し
くってくるような作品だけど、日本の書にない
さを油絵に移し変えた、日本人にしか描けな
い線を描いてるでしょ。線に勢いがあるから、背を
向けていても伸びた素敵なパリジェンヌに見える
でしょ。

彼はあの絵を描いた翌年、わずか30才で亡く
なったそうね。とても残念だわ。ポスターが主
役で私が脇役なんて本当はちよつと癪(しゃく)
なんだけど、私の洋服の鮮明な赤がこの絵に大
きな魅力を与えていると自負しているの。

〔合田笑子〕
名作絵画に

(参考資料：『現代
見る日本の四季』)

「高木由貴子」



▲ガレ珠玉の名作《トケイソウ》。作品底部に転倒防止シートをつけ、免震台の上に乗せている。

▲須田悦弘さんと設置された作品「チューリップ」

〔高松市美術館学芸員 牧野裕二〕

日および祝日の午前11時～、午後2時～1日2回、2階展示室にて行います。